

1 今までの漢字教育への疑惑

私が高等学校の教師をしていた頃のことです。それは、終戦後、間もない頃のことでしたが、しばらく英語科を担当していたことがありました。その時、数人のアメリカ人と親しく交際する機会を持ちましたが、彼らの書く文章を見ると、意外に思うくらい、綴りに誤りがあったのです。その時、私は、文字こそ26字に過ぎないが、これを組み合わせ合わせて、文を正しく書き綴ることは、決してなまやさしいことではない、ということをつくづくと考えさせられたものでした。

やはりその頃のことです。まだ満三歳の誕生日を迎えていなかった長男が漢字を読む、という事実を私は知ったのです。ある日、私はこたつにあたりながら本を読んでいますと、長男が私の膝に乗り込んで来ました。そこで私は、その読みかけの本を伏せて、子供を抱いてやりました。その本の表紙には、「国語教育論」と、書名が大きな字で書かれてありました。子供は、その「教育」という文字を、一つ一つ指で示しながら、「きょう」「いく」とはっきり読んだのです。私は、その時、自分の耳を思わず疑いました。こんなことがあり得るものだろうか。偶然に、そういう音声が発せられたものではないだろうか。私は、傍にいた妻に、「こんな漢字を教えたのか」と尋ねてみましたが、「教えない」という返事です。ますます驚きましたが、「教育」などというむずかしい漢字が、教えないのに読めるはずがありません。私は、さらに妻に問い質してみました。すると、「そう言えば、いつだったか、もう一月くらい前のことかと思うが、『教育音楽』という雑誌の書名を指さして、しきりに何かと尋ねるので、その時それを読んでやった記憶がある」という話なのです。それにしても、これをどう考

えたらよいのでしょうか。この複雑な字形、子供には縁の遠い発音。それを、ただ一回の機会によって結びつけてしまったのです。とても信じがたいことです。私は、思わずうなってしまったものです。

しかし、この時私は、「漢字の字形の複雑さは、文字の学習に何の障碍にもならないのではないだろうか」ということを、ふっと感じたのです。

一昔以上の昔の上記の二つの事実は、その後いつも私の心に懸っていて、国字問題や文字学習に対する私の関心は、次第に高まっていったのです。

トルストイの人生論だったと思いますが、水車を知るために、水の研究をする男のことが書かれています。私は、どうもこの男のような性格を持っているのです。これではいけない、と時々反省はしているのですが……。そんな性質から、私は、よい高校の教師であるために、中学教師から出直してやってみたい。中学生をよく知らなければ、高校生の正しい指導は行えない、と思い、昭和25年、中学に転出してその一年生を担当しました。そこで私は、小学校を卒業して来たばかりの子供たちを初めて扱ってみて、その「読み書き能力」がどんなに低いかを知ったのです。「小学校では、六年間にこれだけの力しか養えないのだろうか」「こんな力では、どんな教科書でも参考書でも、理解することができないのではないだろうか」つくづくそう感じた私は、早速、数人の同僚の協力を得て、全校一千名の生徒に対して、「漢字の読みの能力調査」を行いました。それは、社会科、数学科、理科の各教科書に使用されている漢字のうち、それぞれ百の熟語を選んで提出し、これにふりがなを付けさせる、というテストでした。ところが、その結果は、提出語彙のおよそ40%

しか読めない、という実に憂うべき実態を示していたのです。こんな能力では、社会科でも、数学科でも理科でも、その学習を進めていくことが満足にできないではありませんか。「一体、小学校ではどんな漢字指導を行っているのだろうか」この疑問が、この時以来、私の頭の中を大きく支配するようになりました。

小学校教育の実際を知る機会は、意外に早くやって来ました。翌、昭和26年、地方教育委員会の誕生により、私は指導主事になる機会を得ました。当時私が住んでいた、東京都下八王子市教育委員会の指導室に勤務することになったのです。中学も高校も担当するのですが、私はできるかぎり多く小学校を訪問しました。そして、小学校の先生たちと語り合いました。しかし、その実態を見、聞き、知るほどに、国語教育、とりわけて漢字教育は、これではいけない、と考えるようになりました。それで、小学校の先生たちに、私の考えをいろいろと訴えたのですが、漢字教育に関する私の意見は、多くの先生たちには、机上の空論としか聞えなかったようでした。事実それはそれに違いなかったでしょう。私には小学校教師の経験はなかったのですから……。「よし、小学校から出直そう。自分で、直接子供たちを受け持って、指導してみなければ、何事も机上の空論に過ぎないのだ」と、そう考えた私は、昭和28年、長男の峻が小学校に入学するのを機会に、同じ年齢の小学校一年生を担当するならば、私にも、小学生が指導できないことはあるまい、と考え、その決心を固めました。

私が小学校に移った年の、その秋の頃だったと思います。朝日新聞の学芸欄に、「操縦棒の逆用」「科学者に必要な**天才的非常識**」という見出しの記事が載りました。この記事は、漢字練習につい

ての私の考え方を支持してくれるものであり、私を励ましてくれるものでした。今、ここに、その要旨を紹介しますと……。

その筆者は、「超音速ジェット機」という映画を見たというのです。超音速で急降下するジェット機は、操縦士が機を上昇させようとして上昇舵を動かすのですが、いよいよ降下するばかりで一向に上昇しないというのです。超音速という未曾有の速度は、今までの、音速以下の世界とは全く異なった、物理作用を呈し始めたのです。機はついに地面に激突して自爆してしまいます。しかし、他の一機は、とっさに、**常識に反して**下降舵を動かして、逆に上昇できて一瞬難を免れます。……筆者は、この場面に大変興味を感じた、と言って、「常識で予測することのできない結果の多い科学の世界では、この天才的非常識が極めて必要である」と論じ、その類例として、筆者の専門である医学界から、いくつかの例を挙げていましたが、その中で、特に私の興味をひいたのは、ツベルクリン反応の話でした。

現在、どこの病院でも、二千倍に薄めた液を使って注射している。それで陰性の場合、もっと濃い、百倍に薄めた液を使って調べることにしている。常識的に、濃い液のほうが、強い反応を示すのが当たり前だと考えられるが、しかし、果してそれが正しい方法であるかどうか、念を押してみた人はない。ところが、それがドイツにはいたのである。そして「一万倍、もしくはそれ以上に薄めた液の方が陽性度が高い」という発見をしたというのである。こういう発見は、常識的な理論に従っているかぎり、絶対に発見できるものではない。「ただ常識だけで片づけずに、このドイツの学者のように、つむじ曲りがあっていい。そういう反逆者があってこそ、科学の世界に、進歩も発展もあるのだ」。こう言って、この文は結ばれていたのです。

「漢字の場合もこれだ」。私は、この文を読んだ時、そう直感しました。科学の世界は常識で予測しがたいと言っていますが、教育の世界からみたら、どんなに単純で、どんなに予測しやすいか知れません。その科学の世界でさえこれなのです。まして教育の世界を、常識だけで片づけて、それですませてよいはずがありません。漢字はむずかしい文字だと言われて、小学校の一、二年生の教科書には多く提出されません。それは確かに常識から言えばそうでしょう。しかし、この常識を破って、一年生からもっと多くの漢字を提出したらどうでしょうか。ツベルクリンの溶液を薄めたら、かえって反応が強くなったように、多くの漢字を提出したら、かえって学習がやさしくなる、ということがないとは断言できないはずです。まして、三歳に満たない子供でさえ、「教育」というむずかしい漢字を読むことができたという事実があるのです。何事も、**実験しないで**常識だけで片づけてはいけません。私はこうして、今までの私の考えを実験しようという決心を、ここで一層固めることができたのです。

一年間に、百字の漢字を提出して、その習得が思わしくなかった場合、これを80字に減らせばやさしくなるだろう。またもし、80字でもいけなかったら、50字に減らせばよい、と考えるのは**常識**です。今までの漢字教育は、こういう常識的な判断にだけ頼って行われてきたのです。「一年間に、40字や50字(文部省で示された漢字の学年配当表によれば、小学校の一年生に対して46字である)」という少ない漢字では、文字の形、読み方、意義などの点で関連のあるものが少なく、従って記憶するのに一つ一つ個別的に機械的に記憶しなければならず、学習効果が上らないのではないだろうか。字形や意義の類似、対照などの関連により、構造的、論理的記憶ができる

ように、多くの漢字を提出した方が、かえって学習がやさしくなるのではなかろうか」こういう考え方も成立するのであり、ましてツベルクリンの話からすれば、一年生に対して少なくとも二百か、三百の漢字を提出し、指導してみる必要がある、と考えたわけです。

「論議はもはや尽されている。今は実行に移すだけだ」とは、国字改革論者の口から、よく聞かされる言葉です。しかし、論議の裏づけとなるべき実験が、一体どれだけ行われたのでしょうか。明治以来、何の改善も、工夫もなされないままに現在に及んだような今の漢字教育の方法では、結果はいつも決まっているに違いないでしょう。実験は、方法や内容を変えて、いろいろ試みなければいけないのです。あのツベルクリン注射の溶液にしても、その薄め方は無限と言うべきほど数多くあるのであり、そのいずれが最も有効であるかは、その無限の実験を試みないかぎりわからないはず。だから、漢字教育にしても、その方法はやはり無数といってよいほど方法が考えられるのであり、それを一通り試みた上でなければ、結論は出せないはず。論議が尽されている」どころか、まだ論議を始めるべき段階にも達していないのです。肝心の論議の根拠となるべき実験が、何一つ行われていないではありませんか。例えば、漢字の学年配当にしても、一年生に対して、40字、50字……百字、二百字と、いろいろに試みなければいけないはず。また、その内容にしてもいろいろ漢字を変えてみなければならぬはず。それは大変な実験ではありますが、しかし、その十分の一にも百分の一にも達しない貧弱な実験で(これは決して誇張ではありません)結論を出し、それですべての漢字教育を拘束することは大

変な誤りと言わなければなりません。もう少し具体的に話を進めて見ましょう。「読」という漢字は、二年生に配当されています。ところが、その扁の「言」は四年生に配当されているのです。「言」は、文字としても、「読」よりはやさしいはずです。なぜ、こんな配当になったのでしょうか。それは、確かに一つの実験の結果の結論ではあったのです。ただその実験が、「読」が二年、「言」が四年に配当された教科書によって行われたのです。だから、「読」も「売」も「言」も、その教科書が二年に配当してあったら、結果は皆二年配当が適当だということになったかも知れない、と私は思っています。だから、私が一年生に「読」「売」「言」を三つとも提出し、指導した時、子供たちはこれを見事に習得して、それが一年生にとって少しも無理でないことを証明しました。

さて、昭和28年4月、長男の小学校入学と共に、私は小学校の一年生を担当することになりました。以来、8年の月日が流れて、その当時の一年生は、わが子と共に、今は中学の最上級生に成長しています。それにひきかえ私は未だに小学校の一年生を相手に、漢字指導のより優れた方法を発見すべく、同じ道を歩んでいます。子供の成長に比べると、私の歩みは遅々として、はかどりませんが、しかし、この間に私は重大な発見をしたと思っています。

「かなを学んでから漢字へ」という学習方式は、わが国の学校制度の出発と共に、今に至るも変らない方式となっています。それはもう疑う余地のないほど当然の、絶対的な方式であるかのように権威を持って、今日に及んで来ています。しかし、私は、これを逆にして、「漢字を学んでからかなへ」という学習方式を考え、これを行っ

てみました。これこそ真に正しい文字学習の順序であると考えて行ってみたのです。その結果、「かなから漢字へ」の方式は、非能率的というよりも、誤った学習方式であると、断定せざるを得ない事実を、そしてその証拠を、私はいくつも発見したのです。それは、「漢字を学んでからかなへ」の学習方式と、「かなを学んでから漢字へ」の学習方式と、その両者を自分で行って見て、初めてわかったのです。この二つのやり方を試みるならば、誰でもそれに気が付くことでしょう。しかし、自分で試みないかぎり、この事実に関心することは恐らく困難だろうと思います。

私はこれから、この二つの比較実験について、事実をできるかぎり忠実にお伝えしたいと思います。しかし、私の試みたことは、無数に考えられる学習方法の、そのただ一つを行ったに過ぎません。

「漢字教育の最善の方法はこうあるべきだ」などと、とても言えるものではありません。それを発見するための実験の糸口に手を着けただけなのです。ですから、私のこの実験が一つの契機となって、多くの人々により、様々な実験が行われるようになるならば、真の「漢字教育の在り方」の求められる日もそう遠くないだろうと思います。私は、その日を夢みつつ、その日まで、遅くとも自分の歩みを続けて行くつもりです。